

「外観に惹かれ、香りに出逢う

アリウム ブルーパフューム」

平野佐和 会員

未知の花が嗅覚に伝えたもの

香るものとして、筆頭に挙げられるのが花です。あるとき、もっと積極的に花というものを知りたいと思い、見たことのない外観のユニークな存在を求めて花屋に通うようになりました。その時ごとの私自身の感覚に響いた未知の花を一種類のみ入手、数日間、花と共に暮らすのです。その外観を観察しながら、嗅覚に伝わるにおいに出逢いたいと考えました。そのにおいが「香り」として記憶に刻まれるのは嬉しいはずです。



アリウム ブルーパフューム

そのような日々の中、印象深い香りの植物と出逢いました。初夏の陽射しの中で見つけた涼やかな花色。遠くから眺めるとふんわり優美。近づくと、青や紫の星のような小さな花々がきらめいています。その名も知らないうちから、一目で惹かれました。近づくと、ほのかに甘い香りが柔らかく漂います。その瞬間、花屋の主人に「この花を3本ください」と告げていました。植物の名前を尋ねたのは、購入を決めた後です。

「アリウム ブルーパフュームという名前です。お花は甘いバニラの香りがするのですが、アリウムですから茎を切ると萼のようなにおいがハサミに付くので切った後はハサミを洗うことをお勧めします」とのこと。

この名前を先に聞いていたら、「アリウム Allium (ニンニクを意味するラテン語)」という認識に影響を受けて花からは全く違う芳香が感じらることに大きな驚きを感じたかもしれません。

花屋では花に接近して確認した「ブルーパフューム」の香りも、自宅で新しい水とともに生けてみると、花瓶の近くを通るだけでふわりと立ち上がってきました。優しい甘さを感じます。バニラエッセンスのような印象は確かにあります。周囲の空気を柔らかくする、囁くような香り方でした。心地良い雰囲気を堪能しながら約二週間。日数の経過とともに香りが次第に薄らいだことは確かですが、切り花にしては長命でした。

ヒガンバナ科ネギ属*の「アリウム」は、ずっと伸びた茎の先に球状や笠状に細かな花々を咲かせます。原産地は北アメリカ、ユーラシア、北アフリカ。純白の小花が笠状に広がるコワニー、赤紫の無数の小花が球状に密集するギガンチウム、写真のブルーパフューム等の品種があります。(*APG 分類)

「アリウム ブルーパフューム」をインターネット検索すると、さらに興味深いことがわかりました。



北海道農業研究センター(農研機構)のHP中に『アリウム「札幌1号・札幌2号」』のパンフレットを発見。中央アジア原産の野生種を交配し、胚珠培養技術を用いて育成されたそうです。

花が濃青色の札幌1号、淡青色の札幌2号の2種は平成21年に品種登録された切り花用の新品種でした。アリウムでは珍しい青色の花被(かひ)を持ち、芳香性の「札幌1号」の商品名が「ブルーパフューム」だったので。

何故、その花に惹かれたのか

静かな佇まいでいながらも、確実に光の方へ、水と空気によってゆっくりと成長する、植物という存在は魅力的です。花は生命を繋ぐ器官ゆえに、形も香りも、時には人間の力を借りながらも多様化し、進化し続けているのでしょうか。いかなる花にも個性がありますが、私があの初夏の日にこの花に惹かれたのは、その形の珍しさ、遠くからでもわかる密度感、さらには、涼やかなブルーであったからと思ひ起こします。

とりわけこの花が印象深いのは、その姿だけでなく、香りに意外性があるという事実でした。これまで多くの切り花に触れ、感じてきたのは、どんな花にもその「におい」はあるものの、「良いにおい」として確かに「香り」を持つと感じられるものばかりではないということです。外観に満足できただけでも嬉しく、香りにはさほど期待していなかったにもかかわらず、好ましく思える「香り」と出逢えたのです。

見える姿だけでなく、その香りも感じられたとき、私の脳内には複数の記憶が回想されていました。

認知科学者、哲学者であるA・S・バーウィッチが著書の中で次のように記した内容にも重なります。

「においの知覚はその作用の価値評価と結びついており、知覚者としてのあなたの状態を反映する。

・・(中略)鼻は世界についてだけでなく、自分についての情報も伝えるのだ」。

回想された二つのフレグランス

「ブルーパフューム」に出逢う少し前、この春日本で新作として登場した「ブリオーニ BRIONI」のオードパルファムを試していました。その上品なネイビーブルーの端正なボトルを見て、是非とも香りを確認したかったのです。1945年にイタリア、ローマにて創業の紳士服ブランドから新たなシングネチャーフレグランスとして発売されたものです。完璧なスーツ、ブリオーニのシックなスタイルがボトルからも香ってきそうです。



ブリオーニ オードパルファム

香りも、絶妙なバランスを持つ優雅なものでした。

華やかな明るさはフレグランスの魅力の要素にはなりますが、同時に程好い柔らかさを伴って初めて人を引き立てるのではないのでしょうか。香りの素材としては主に、ピンクペッパーコーン、シダーウッド、トンカビーンズ、バイオレット、アンブロクサン等が挙げられており、調香師はミッシェル・アルメラックと記されています。

メンズフレグランスと聞き、既存の男性用の香りに通底する香り方も想像していましたが、女性の私が身につけても羽衣のように繊細で柔らか。軽やかな抜群の着心地をもつ装い、そのものを体感したようです。

「柔らかな洗練を香らせるブルーボトル」として、私の記憶に刻まれようとしていたこのフレグランスは、濃青色の花「アリウム ブルーパフューム」の色や香りを感じる日々の中で幾度も回想していました。

もう一つ、「青い色」と「バニラ様の香り」という組み合わせから、瞬時に思い起こしたフレグランスがありました。

これこそまさに個人的嗜好による記憶の反映ですが、自身が20代の頃から今もなお、時おり愛用する「シャリマー SHALIMAR (GUERLAIN)」のパフュームです。1925年に発表されたものですから、もうすぐ生誕100年を迎えることになります。オリエンタル系フレグランスの不朽の名作と呼ばれています。

「シャリマー」のパフュームボトルを初めて見た時のことは、今でも鮮やかに憶えています。まずはその形に惹かれたのです。噴水を模したようなブルーの蓋にまずは目が止まり、手に取ってみたいくなりました。



シャリマー パルファン／ゲラン

幸福感を想像させる青い蓋と黄金の液体のコントラストに魅了されて試した香りは、最初に魅了された外観のイメージに調和するものでした。当時は日記を綴っており、この日のことも記録していました。

一瓶使い切ったフレグランスを引き続き使いたいと願い、再度入手するという銘柄は数えるほどしかありませんが「シャリマー」はその一つになりました。香りだけではありません。涼やかでまろやかな優しさを醸し出すブルーの蓋を持つボトルの外観も必要でした。自身の青色への想いと、バニラの甘い香りが奥ゆかしく漂うイメージは、このパフュームとの出会いが発端なのかもしれません。

感覚から会いに行ける楽しさを

「未知の花に、まずは自身の感覚から会いに行こう。その先にある発見を経て知識にしていこう」と思い立って3年目になります。広い地球上全てを探すことは不可能ですが、身近な花屋を訪ねるだけでも、思いがけず嬉しい発見につながることを実感しています。改めて、視覚だけでなく、嗅覚をフル活用できることに感謝したいと思います。

参考文献

- 1) 渡辺修治、大久保直美 『花の香りの秘密－遺伝子情報から機能性まで－』 フレグランスジャーナル社 2009
- 2) 深野俊幸、大田花き 『花屋さんに並ぶ植物がよくわかる「花」の便利帖』 KADOKAWA 2020
- 3) A・S・バーウィッチ、大田直子訳 『においが心を動かす-ヒトは嗅覚の動物である』 河出書房新社 2021
- 4) 北海道農業研究センター(農研機構)品種紹介パンフレット『アリウム「札幌1号・札幌2号」』 2010
- 5) 篠田 浩一・村田 奈芳 『青色花で芳香性を有するアリウム新品種「アリウム札幌1号」,「アリウム札幌2号」の育成経過とその特性』 北海道農業研究センター研究報告 No.184 2006年
- 6) 『BRIONI』 HP
<https://www.brioni.com/ja/jp/fragrances>

平野佐和 (Sawa HIRANO) プロフィール

- ・ プランナー
 - ・ 香りの専門誌『PARFUM』編集メンバー
 - ・ 文化服装学院講師
- <http://www.sawa-hirano.com>